

『アンサンブル』に学ぶ初級教科書の方法 —教室実践を通して—

三 上 純 子

1. はじめに

フランス語を教えはじめて十数年、その間いろいろな教科書を使ってきた。しかし、私自身の教師としての力量不足を承知の上で言わせていただければ、繰り返し使いたいと思えるだけの学習効果を実感できた教材は数少ない。『アンサンブル』（ロラン・スレット著、芸林書房、1994）は、そうしたなかで、私に初級クラスの授業について貴重な示唆を与えてくれた教科書といえる¹。

私はこの教科書を、週1回の講読・会話クラスで使った。そしてこれまで使ってきた教材にくらべて、授業中、学生が楽しみながら自主的に課題をこなす姿勢が感じられると同時に、平均的な学力の学生にもある程度の基礎力がついたという印象をもった。

本稿では、『アンサンブル』を使ったクラスの長所に着目し、この教科書に見られるオリジナリティについて考察してみたい。以下、金沢大学の未習外国語の履修制度、『アンサンブル』による教室実践、『アンサンブル』に学ぶ方法という順序で検討を進めたい。

2. 金沢大学の未習外国語の履修制度

私がどのようなクラスでこの教科書を使ったかという点についてももう少し詳しくふれておいた方がよいと思われるので、現在の本学の未習言語（いわゆる第二外国語）の履修制度について簡潔に説明しておく。

本学では全学部（文学、法学、経済、教育、理学、薬学、医学、工学）の学生に対し、未習言語の4単位必修を課している。一年次に週1コマ1単位の授業を前期2コマ、後期2コマ履修するのが標準的な履修形態となる。1994年度に新カリキュラムに移行した際に、学生による、担当者、時間帯の選択の自由

度を拡大するという方針がとられたため、クラス指定は一切行なわれていない。学生は第1回目の授業の日に、履修を希望する外国語の開講クラスのうち、自分にとって都合がよい時間帯に出席する。履修希望者が制限を越えた場合には、くじ引きなどで調整が行われる。

このような制度のもとでは、一つのクラスにあらゆる学部の学生が集まる可能性がある。クラスのなかに多様性は感じられるが、学力、関心という観点から見た場合、差の大きい不統一なクラスともなる。

さらに、ほとんどの外国語で、週2コマの授業は連動していない。フランス語の場合、週2コマの内訳は文法1コマ、講読・会話1コマであるが、このクラスの組み合わせもまったく学生の自由に任されている。そこで、文法と講読・会話の授業内容が連動していないばかりか、たとえば、ある会話クラスの担当者は、自分の会話クラスの学生たちが複数の文法クラスで学んでいるという状況に立ち会うことになる。2コマの授業内容を総合する仕事は個々の学生に委ねられている現状である。

カリキュラムについては、文法クラスでは大まかな学習項目の割り振りをしており、1年終了時に条件法、接続法まで概観する学習内容となっている。それに対し、講読・会話のクラスでは、あまり進度を縛らず、文法クラスで不足しがちな実践的な練習に重点を置くという合意がなされている。文法クラスでは学習項目が多すぎてかなりの速さで進まざるを得ず、特に動詞の法、時制については学生の消化不良が目立つという問題を抱えている。

学生の自主的な学習を促し、学習効果を高めるという観点からは、個人的には、現在の履修制度には改革すべき点が多いと考えているが、各学部の意向を踏まえて、未習外国語科目の担当者間での意見調整を行なうという作業は一朝一夕には進まない。

このような状況で、担当者個人のレベルでクラスの活性化をめざすとすれば、文法クラスよりは、講読・会話クラスの方が工夫しやすい。幸いフランス語は平均すると30人程度のクラス規模で、実際にはばらつきはあるものの、クラス運営上は恵まれた環境である。次に示すのは、昨年度、登録者数26名(文学部3、法学部2、経済学部6、教育学部3、理学部3、医学部2、工学部7)と

いうクラスで『アンサンブル』を使って行った教室実践である。

3. 『アンサンブル』を使った教室実践

1) 教科書『アンサンブル』の基本方針と構成

『アンサンブル』は、東北大学の外国人教師などの経験をもつフランス人、ロラン・スレット氏により1994年に公刊された。日本人の初心者を対象とした全13課、166ページの教科書である。別売りの学生用CDがあり、教師向けには教授用ガイドと教室用のカセット4本がついている(1998年12月発行の新訂版では教科書にCDが添付された。1999年1月付記)。週1回の授業で1年かけて教える学習内容となっている。

その基本方針は以下の通りである。

・ Apprendre mieux

文法事項は限定し、少なくしかしよりよく学ぶ。文法のシステムを理解し、身につける練習を十分にやる。それにより、基礎を完璧に修得し、フランス語の「センス」を身につける。

・ Progresser

各課における文法の新出事項、新出語彙は限定し、学生が意気阻喪しないように配慮する。学生が自分の進歩を直接的に感じとれるようにする。

・ Communiquer

知的な理解をコミュニケーション活動に役立てる。第1課から、ゲームなどを通じて、学生をフランス語でコミュニケーションする状況に置く。そして、次第に自分のことについても表現できるように導く。

これらの点について、より具体的には次章で検証することとし、ここでは各課の構成を紹介しておこう。各課は、前課の復習、ディアログ、文法、語彙の説明、個人用の練習問題、教室で行うペア・ワーク、模倣作文からなっている。巻末には仏和、和仏のインデックスがついている。

2) 授業の進め方と学力評価

クラスでの指示や説明など、授業は基本的には日本語で行った。先に述べた

ように本学の場合、学力、関心ともに差があるクラス構成なので、第一に平易な授業を心がける必要があると考えたためである。1 課を 2 回の授業で終了するペースで進んだ。授業はおおむね、前回の復習、新しいテーマの提示から入り、第 2 段階として新出事項の説明、発音練習（全体授業）、練習（ペア・ワーク）を行う。この第 2 段階の部分は必要に応じて数回行われることになる。そして、第 3 段階として、会話の内容を理解し、読みの練習を行う。ポイントとなる部分は覚えるように指導する。必要に応じて、個人用練習問題、模倣作文を宿題として課した後、最終段階で、会話の一部を使ったロール・プレイ、Vrai ou Faux や簡単なフランス語の質問による内容確認などを行った。

この教科書のシステムでは、クラス全体にたいする説明や聞き取りの練習などの他は、学生はペアを組んでゲーム化された練習問題に取り組む時間が圧倒的に長い。授業時間の 3 分の 2 以上は言語活動を行っている。その間、私は机間巡視を行いながら、学生の質問に答えたり、不活発なペアに助言を与えたりする。数人の学生に共通する質問や問題点などは、ペア・ワークを終えたあとで、クラス全体に注意するようにした。発音については、学生が積極的に尋ねる場合には個人指導を行ったが、コミュニケーション上大きな問題がない場合には特に矯正はしなかった。まずフランス語を話す楽しみを覚えてほしいと願ったからである。

学力評価は平常点と学期末試験を総合して行った。平常点は、授業中の練習態度、数回の小テスト（書取）と作文の宿題により評価した。学期末試験も平常の言語活動が評価されるように心がけ、口頭試験と聞き取り試験 5 割、筆記試験 5 割という割合で行った。個別に行う口頭試験は、学生が緊張する、評価を客観的に出しにくいという欠点はあるが、学生一人一人の授業にたいする感想などが聞けるよい機会でもある。口頭試験の課題はあらかじめ伝えて準備させておいた。ちなみに前期口頭試験の内容は以下のようなものである。

- ・挨拶ができる。
- ・自己紹介ができる（名前、年齢、国籍、職業、住んでいる場所、結婚しているかなど）。
- ・好き嫌いがいえる。

- ・数字が読める。
- ・教科書が読める。

これらの項目について、声の大きさ、発音、イントネーション、質問の聞き取り能力などについてチェックした。このような評価方式は積極的に話したいという欲求をもっていない学生には苦痛だと思うので、1回目の授業で授業の狙いなどを十分に説明するようにした。

3) 授業における学生の反応と学習効果

まず、文法クラスにくらべて、クラスの雰囲気がリラックスしているのが大きな特徴である。学生たちはおおむね自発的にペアワークに取り組んでいたが、教室をまわっていると、気軽に質問が出た。学習事項が限定されていると、かえって学習者は自分から疑問をもち先を知りたいということも実感できた。同じ文法事項を学ぶにしても受動的に説明を聞くよりも自ら求めて学ぶ方が記憶に残ると思われる。またペアワークのおかげで、学生同士で教えあう機会も多くなる。これも教える学生にはいい勉強になる。他方で、リラックスしすぎて授業の緊張感が乏しくなる危険もないわけではない。たとえば、ペアでの練習が多いので、うまく切り替えないと早く練習を終えたペアがおしゃべりに流れる可能性も高い。

学生の姿勢でもう一つ目立ったのは、欠席が少なく、1度欠席してもそのまま来なくなるというケースが少ないという点であった。また、毎回3~4題の宿題を課していたが、模倣作文を含めて、文法クラスにくらべて宿題をやってくる率も高かった。

学習効果については、口頭試験の課題は全員ほぼ達成できていた。たとえば、試験に読み取り、聞き取りを課していたので、大部分の学生が100までの数字を言えるようになった。数字をマスターすると、中級レベルでの応用の可能性も広がる。書く方については、模倣作文に慣れてきた頃に作文の宿題を出した。以下に挙げるのは、「友達について語る」という課題にたいして12月に提出された宿題例である（これらの作文には最低限の訂正しか施していない）。

1) J'ai une amie qui s'appelle Eriko. Elle est de Shizuoka. Mais elle habite à Kanazawa maintenant.

Elle est étudiante. Elle étudie beaucoup les mathématiques. Elle est plus grande que moi. Elle est gaie. Elle est gentille.

Elle est sportive. Elle aime jouer au tennis. Elle joue au tennis le samedi. Et elle aime faire des courses. Eriko et moi, on va souvent à Korinbo.

Elle aime beaucoup voyager aussi, mais elle ne voyage presque pas parce qu'elle n'est pas libre. Elle veut aller à Paris.

2) J'ai un ami qui s'appelle Kashimoto. Il aime beaucoup les glaces, mais il n'est pas gros. Il est mince.

Il n'aime pas chanter. Mais il aime beaucoup écouter de la musique. Il est violent quand il prend de l'alcool. Il aime beaucoup le mah-jong. On joue au mah-jong tous les jours. Il est très fort au mah-jong.

Il n'est pas sportif. Mais il aime faire du kendo. Il habite dans un appartement ensoleillé.

3) J'ai un ami qui s'appelle Yamamoto. Il a dix-neuf ans. Il est aussi grand que moi. Il étudie et s'amuse très bien. Il habite à Tokyo. Il est étudiant à l'Université de Tokyo.

Il aime chanter et jouer de la guitare. Il m'a appris à jouer de la guitare. Il joue de la guitare mieux que moi.

Je lui ai téléphoné le mois dernier. Je lui téléphonerai le mois prochain. Je m'entends bien avec lui, mais il est plus têtu que moi.

学習事項が限られているのでまだ模倣作文の域をでていないと言えなくもないが、既習の文法事項、表現、語彙を活用して平易なフランス語の文を作れるようになってきている。第三例では、文法クラスで学んだ複合過去形、単純未来形、

代名動詞も積極的に使われている。このような意欲的な作文がすべてではないが、この時点で大部分の学生が友達について10行程度の描写はできるようになっていた。文章の骨組みにかかわるような構文上の大きな間違いが少ないのも評価できる点だと思われた。

4) 教科書、授業に対する学生の評価

前期と後期の最終日にクラスでアンケートをとった。「この教科書によるフランス語学習に興味が持てましたか」という問に対し、前期は履修者の82%、後期は100%の肯定的回答があった。練習量については前期73%、後期90%がちょうどよかったと答え、進捗については、前期95%、後期90%がちょうどよかったと答えている。教科書、授業については次のような感想が寄せられた。

- ・会話表現が充実している。(5名)
- ・イラストが多くて見やすい、わかりやすい、参加しやすい。(3名)
- ・繰り返し練習する練習問題があるところがよかった。(1名)
- ・2人組で会話する練習が多くてよかった。(4名)
- ・ゲーム感覚で学習できるので、楽しく、わかりやすい。(3名)
- ・初心者でも参加しやすい授業だった。(1名)

学生は他の教材による会話の授業と比較できるわけではないので一概には言えないが、これらのアンケート結果によれば、この教科書による授業が基本的には大多数の学生に支持されていたと考えることができよう。学生の感想の中には著者の狙いにぴったりと反応しているものもある。

5) 今後の課題

授業の進め方についての不満としては、「もう少し発音を詳しくやってほしかった」という意見があった。細かい発音チェックが学生の発話意欲を減退させてはという配慮から発音の目標をあまり高くおこななかったせいもあろう。特に悔やまれるのは、時間が足りなかったこともあり、綴り字と音の関係の学習

が不十分であった点である。

今後、教室でのフランス語によるコミュニケーションを増やして行く意味でも、クラスでの指示などをなるべくフランス語で行うようにしたいと考えている。また学生の自主性をより引き出すためには、学期の終わりに学習事項を応用したペアによるスケッチなどを作らせるといった評価方法をとることもできるだろう。

4. 『アンサンブル』に学ぶ初級教科書の方法

1) 学習事項の絞り込み

すでにふれたように、この教科書の方針の中には、「文法事項は限定し、しかしよりよく学ぶ」という項目がある。試みに動詞の法と時制の扱いについて見てみよう。『アンサンブル』で扱われているのは、直説法(現在形、複合過去形、半過去形)と命令法だけである。直説法半過去形については概念の導入しか行われていないので、文法事項の定着練習としては、直説法複合過去形までと言ってよい。このほかにも例を挙げれば、代名詞は人称代名詞と *y* に、関係代名詞は *qui* に限定されている。この教科書は日本で作られた教科書としては例外的に大部であり、166 ページもあるのにもかかわらずである。『アンサンブル』の文法項目の少なさは従来の教科書にくらべて際だっている。

これは文法事項ばかりでなく、*Actes de parole* についても同様である。「自己紹介」、「挨拶」、「好みを言う」、「日課を説明する」など十数項目に絞られており、同一のテーマが2課にわたって展開される場合もある。この結果、『アンサンブル』では、精選された学習事項の定着と応用に従来の教科書以上に時間をかけることができる。言い換えれば、学習者にとっての進度が緩やかになるわけである。

2) 螺旋状の進行

各課の構成が前の課の復習から始まっていることはすでに述べたが、文法的にも *Actes de parole* の面でも、全体を通して、既習事項が後続の課でまた練習できるように配慮されている。たとえば数字の練習も1回だけではなく反復

的に扱われているし、「好みを言う」といったテーマも何課かあとに、新しい要素を加えて展開するというように、既習事項の定着と新出事項の導入がバランスよく重なった形で進展するスタイルとなっている。学習者はコンピューターではない。1度インプットした情報が常に再生可能というわけにはいかない。既習事項は繰り返し思いだし、使われなければ身につかない。多くの教科書が運用能力の習得について線状の進歩を期待しているのにたいし、『アンサンブル』では螺旋状の進行が想定されているのが感じられる。

3) 豊富な練習問題

上記のようなコンセプトは何よりも豊富な練習問題によって具体化されている。しばしば指摘されているように、従来の日本の教科書は練習問題が少なすぎる²⁾。『アンサンブル』に匹敵する分量の練習問題がある教科書としては、“J'aime vol.1” (鵜澤恵子、小石悟著、東京日仏学院、1990) が挙げられる程度である。

『アンサンブル』には、a) クラスで行うペアワーク b) 一人でやる宿題 c) 教師がクラスで使う発音、聞き取りのテープという3種類の練習問題がついている。以下その特徴を分析的に見てみよう。

a) クラスで行うペアワーク

・文法事項や表現の定着化を図るには口頭による反復練習が不可欠だが、そのためにパターン・プラクティスによる機械的な反復練習に頼りすぎると、頭を使わない単調な練習になってしまう恐れがある。その点、この教科書では、練習のゲーム化により第1課からコミュニケーションをしながら反復練習ができるように工夫されている。一人一人の学生が大部分の授業時間を言語活動をしながらか過ごせる意義は大きい。

・遊びの要素は学生における「フランス語は難しい」という抵抗感を小さくする効果もある。

・ペアワーク自体がシンプルである。ある新出事項の定着をねらうときに、既習の学習事項を踏み台とするが、その練習問題のなかに他の未習の学習事項を複合的に入れることをしない。特に前半ではこの方針がよく守られている。私

見によれば、多くの教科書のペアワークは複雑過ぎる。たとえば、冠詞や、動詞の活用練習をするときに、たくさんの新出語彙、フランスの地名、覚えてもいない数字や時刻の表現などが組み合わされていると、学生はその場では何とかパターンどおりの会話ができて、その練習でポイントになっている新出事項を身につけることはできない。教師は、初心者が avoir の活用や否定の ne pas を入れた文を自然に発音できるまでにどれだけの反復練習が必要かということをも十分認識する必要があるのではないだろうか。ポイントを絞った練習を数多くこなした後に現実のコミュニケーションにつなぐ複合的な練習に至るべきであろう。

b) 一人でやる宿題

- ・この練習も文例は学生が繰り返し発音し慣れ親しんだ短い文が使われている。そのためたとえば、4課で否定文、疑問文が導入される場合も、学生は否定文、疑問文の作り方に意識を集中できる。

- ・パズル、なぞなぞなどのクイズ・ゲーム感覚でできる練習が多く、学生は楽しみながらフランス語が学べる。宿題にたいする心理的負担を小さくする効果もある⁴⁾。

- ・従来の初級教科書にくらべてかなりの分量の模倣作文がある。授業中の言語活動やディアログで身についた表現が多く、一つの課の理解を確かめるまとめとしてよくできている。シチュエーションのわかりやすい、日常的な会話文から書くことへと入ってゆくのは無理のない導入だと考える。自由作文へと進めやすい方法でもある。

c) 教師がクラスで使う発音、聞き取りのテープ

- ・これも従来の教科書とくらべて分量が多い。個別の音の聞き取り、イントネーション、数字、男性名詞、女性名詞の弁別、ディアログの穴埋め問題など多様な練習が用意されている。読みの速度、イントネーションなども適正である。私自身は時間の関係で部分的にしか使っていないが、聞く力の養成のためにこれだけの分量の練習問題がついているのは教師にとってはありがたい。ディアログを活用する配慮もされている。

4) 視覚的な教科書構成

先に見たように、学生のアンケートの答えの中には、ユーモアあふれる挿し絵の入った視覚的な教科書の構成を評価したものが多かった。視覚的な表現は彼らが述べているように楽しさ、親しみやすさといった雰囲気の問題ばかりでなく、学習事項の理解や記憶を助けていることも忘れてはなるまい。また、日本で作られている多くの教科書はコストを抑えるために、1ページのなかに学習事項、練習問題などを詰め込み過ぎる傾向がある。このような教科書構成は学習意欲をそそるとは言いがたい。さらに学習事項の頭のなかでの整理にも効果的とは思えない。『アンサンブル』は従来の教科書にくらべて値段がやや高くなっているが、学生からの苦情は少ない。練習問題の分量の問題も含めて、コストから構成を決めるのではなく、教育効果の観点から有効な教科書作りが望まれる⁵⁾。よい教科書は多少高くても売れると考えるのは私だけであろうか。

5. むすびに代えて

教科書『アンサンブル』の方法が学習事項の思い切った精選化にあること、しかしながらその限定が学習の貧困化にはつながってはいないこと、むしろ、学習者の豊富な言語活動を可能とするような多くの練習問題の準備により、基礎力の養成に役立っていることを見てきた。初級の勉強が楽しいものであれば、学習者はフランス語を続ける気になる。その意味でも、『アンサンブル』の方法は、すでに批判の多い、1年間で接続法までを猛スピードで終えるという初級のあり方⁶⁾にたいして、反省を促すものだと思う。

一昨年、パリで語学教員のための研修に参加した折、DELF、DALF といった資格試験をにらむと、今後は教材として教科書よりも documents authentiques を使う比率が高くなるだろうという話を聞いた。コミュニカティブ・アプローチの立場からは、いわゆる人工的なディアログを中心においた日本流の教科書を批判し、documents authentiques を組み合わせた魅力的な授業実践も示されている⁷⁾。われわれが研鑽を積み新しい教材に挑戦できる力をつける努力はもちろん必要であるが、このような授業は教師個々人の準備と力量に負うところが大きくだれにでもできるというわけではない。

したがって、教師の立場からは、少なくとも初級段階では、この本を1冊教えれば、学習者がフランス語の基礎を確実に身につけられるという総合的な教科書はやはりほしい。日本人学生を教えた経験を持ち、彼らの問題を熟知している日仏の語学教育の専門家たちに時間をかけて取り組んでいただくことはできないものだろうか。工夫の見られる教科書が増えてきているとはいえ、毎年送られてくる見本には未だに同工異曲のものが少なくない。コストや大学の履修システム、学生のレベルの多様性などいろいろな問題はあろうが、何よりも学習効果について考え抜かれた教科書が待ち望まれる。

注

1. 『アンサンブル』には多くを学ばせていただいたが、一つ残念なのは、誤植の訂正が十分に行われていないことである。本文はもとより巻末のインデックス中のアクセントの間違いなど速やかな訂正が望まれる（1998年12月発行の新訂版では本文中の訂正は行なわれている。1999年1月付記）。
2. Koishi, Satoru: "Un examen critique des manuels publiés au Japon", *Dokkyo University Studies in Foreign Language Teaching* N°9, 1990, p.123, 及び 中村啓佑、長谷川富子: 『フランス語をどのように教えるか』、駿河台出版社、1995, p. 217 を参照。また『第4回フランス語教育に関する調査集計報告書』（日本フランス語フランス文学会、1991）によれば、市販されている初級教科書に不満を持っている教員のうち20%が「練習問題の数が少ない」と答えている。
3. 『アンサンブル』の練習問題例 p.9 Ex.4, Ex 5。

Ex.4 まず自分の欄にいくつかの職業を男性形・女性形、とりまぜて書き入れてください。次に友達が何を書いたか、例にならって言い当てて記入しましょう。交代で質問し、当たったら続けて質問できます。先に全部言い当てた方が勝ち。



例 質問 Etudiant ? 答え Oui / Non
 質問 Actrice ? 答え Oui / Non

自分	1.
	2.
	3.
	4.

友達	1.
	2.
	3.
	4.

Ex.5 まず自分の欄にいくつかの国籍と職業を男性形・女性形とりまぜて書き入れてください。友達は何を書いたのか、例にならって質問し言い当てましょう。



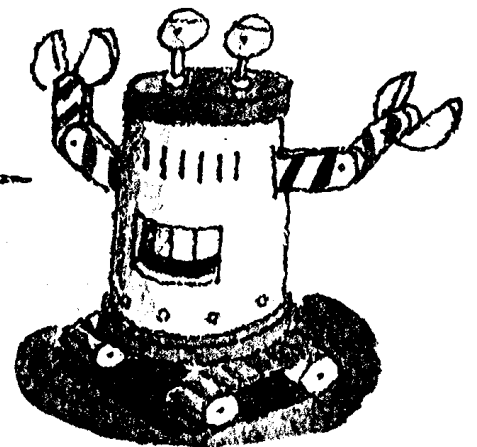
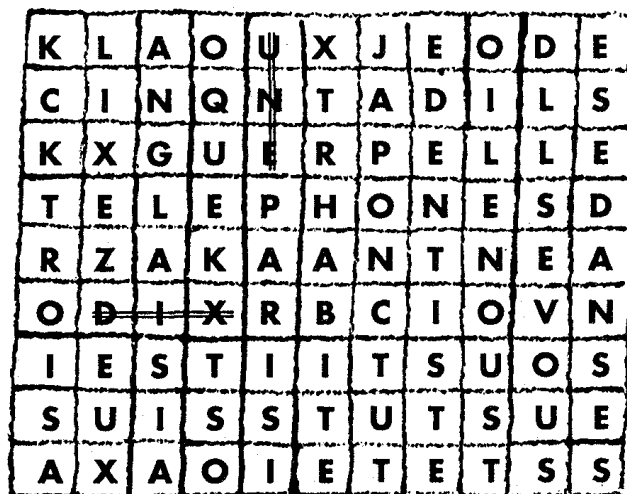
例 質問 **Journaliste japonais ?** 答え **Oui / Non**
 質問 **Etudiante allemande ?** 答え **Oui / Non**

自分	1.
	2.
	3.
	4.

友達	1.
	2.
	3.
	4.

4. 『アンサンブル』の練習問題例 p.40, Ex.50, p.47, Ex.62。

Ex.50 下の表には単語がかくれています。例（棒線部）にならってできるだけたくさん探し出しましょう。



EX.62 Qui sont A,B,C,D,E ? A, B, C, D, E は誰 ? (composé par Yoshihisa Yamazaki)



Jean est journaliste. Il a quarante ans.

Pierre habite à Dijon. Il a vingt-cinq ans.

Luciano est italien. Il a trente-deux ans.

Philippe est pianiste. Il a dix-sept ans.

Marie habite à Paris. Elle a vingt-six ans.

A =

B =

C =

D =

E =

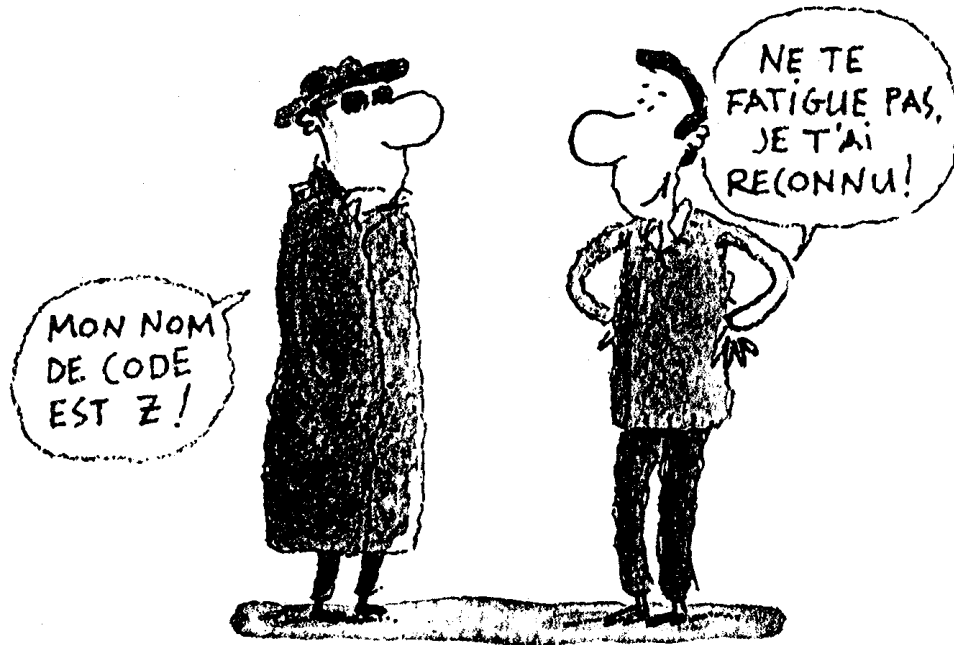
A habite à Marseille.

B n'est pas journaliste. Il est marié.

C habite avec B.

D est français.

E habite à Lyon et n' est pas pianiste.



5. 教科書とコストの問題については、Koishi, op.cit., pp.104-105 を参照。
6. 鵜澤恵子、小石悟：「文法・講読の分割を廃止するために —“J'aime! (vol.1)”を使っ
ての試み—」、『獨協大学外国語教育研究』第10号、1991、p.101 及びDisson, Agnès: *Pour
une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon Bilan et
propositions*, Presses universitaires d'Osaka, 1996, p.54, p.103 を参照。
7. Disson, op.cit., pp.159-197.

参考文献

中村啓佑、長谷川富子：『フランス語をどのように教えるか』、駿河台出版社、1995。

Disson, Agnès: *Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au
Japon Bilan et propositions*, Presses universitaires d'Osaka, 1996.

Vigner, Gérard: "L'Exercice en français langue étrangère", *Etudes de Linguistique Appli-
quée* N°48, 1982, pp.62-79.

Koishi, Satoru: "Un examen critique des manuels publiés au Japon", *Dokkyo University
Studies in Foreign Language Teaching* N°9, 1990, pp.99-132.

鵜澤恵子、小石悟：「文法・講読の分割を廃止するために —“J'aime! (vol.1)”を使っ
ての試み—」、『獨協大学外国語教育研究』第10号、1991、pp.101-104.

片山貢：「練習問題の類型論」、*Etudes didactiques du FLE au Japon* N°7, 1998, pp.41-50.

土屋澄男：『英語指導の基礎技術』、大修館書店、1983。

語学教育研究所：『英語指導技術再検討』、大修館書店、1988。